

別添 4－5

強度行動障害者支援への ICF システム導入による
QOL 支援について

分担研究報告書

強度行動障害者支援のための指導的人材養成プログラムの開発および
地域支援体制の構築のための研究 (22GC1015)
分担研究報告書

強度行動障害者支援への ICF システム導入による QOL 支援について

研究分担者：安達 潤 (北海道大学大学院教育学研究院)

研究協力者：なし

研究要旨

A 研究目的) 強度行動障害支援において「行動問題の軽減」に留まらず生活の質の向上に向けた QOL 支援として ICF システム (ICF を援用した支援システム) を導入し、受講者における QOL 支援の重要性の理解と ICF システムによる評価と QOL 支援の実際を検討するとともに ICF システムのより平易な活用に向けた改善を行うことを目的とした。

B 研究方法) ICF システムの強度行動障害支援における位置づけと活用について事前講義を行い、日常生活行動場面アセスメントと ICF システムの評価を連動させて評価労力を軽減し ICF システムの評価は研修前後で実施した。ICF システム導入の効果確認については、①研修終了後に事前講義の評価アンケート、②ICF による QOL 支援の評価アンケートを実施した、③研修前後の対象者概要 (ICF のフォーム) を QOL 支援の観点から分析した。④研修前後の ICF 評価結果の分析により強度行動障害支援に関連する ICF 項目を絞り込んだ。

C 研究結果) ①と②ICF システムの位置づけと QOL 支援の重要性には高い理解と評価を得たが、ICF システムの活用については情報の多さと複雑さが指摘された、③ICF システム、冰山モデル、機能的アセスメントの支援に QOL 支援の観点がかなり反映されていた。④絞り込みの結果が令和3年度の ICF の項目有用性調査と一致し、絞り込みの妥当性が確認された。

D 考察) ICF の位置づけと QOL 支援の評価は高かったが、それは ICF システムだけに直結するものではなく、機能的アセスメント・冰山モデル・ICF システムの3つを相互関連するものとして捉えつつ困難性を軽減する支援として理解した結果と考えられる。ICF システム活用の複雑さは QOL 支援の進展を阻む一要因となりえる。

E 結論) 強度行動障害支援への QOL 向上の意識づけは ICF 観点の導入で可能となったが、QOL 支援をより広く進めていくには ICF システムを容易に活用するための改善が求められる。

A. 研究目的

1. 背景

強度行動障害を呈する人たちの多くは背景に自閉スペクトラム症 (以下、ASD と記載する) の特性を有する人たちである。強度行動障害とは、生活の中に潜在する「彼らの世界の捉え方と周囲環境のミスマッチ」が生活不適応をもたらし、その結果として表面に現れてくるものであるという冰山モデルで説明される。強度行動障害は、激しい自傷や他傷、物壊

しなどの行動問題 (以降、本報告では課題行動と表記する) で特徴づけられるため、支援者にとって対応が難しく「課題行動の軽減や消失」が目的となりやすい。しかし冰山モデルに従えば、ASD の世界の捉え方 (認知特性) の理解なしに適切な支援を行うことは難しく、その結果、外側から課題行動を抑え込む、課題行動が発生する生活場면을制限するといった「虐待との連続線上」にある対応が発生しやすい。そのため、強度行動障害支援は「課題行動の軽減や消失」が目的となりやすく、その目的達成の判断は

「支援者の労の軽減や消失」に置き換えられてしまうリスクを孕むものである。その結果、支援の焦点となっている特定の場面での課題行動の軽減や消失によって支援者側に目的達成感が生じるものの、強度行動障害を呈する人たちの生活の快適さが根本的に改善されないために、新たな課題行動が発生してくることもある。以上のことは、課題行動の軽減や消失が強度行動障害者の生活改善の必要条件ではある一方、十分条件を満たすものではない可能性を示唆している。

2. 目的

本研究では、昨年度に引き続き、強度行動障害者の生活改善に向けた QOL 支援として ICF システムを導入し、その効果を検討する。なお、本研究のもう一つの目的として、今年度の ICF 評価結果の分析に基づき強度行動障害支援に特化した ICF 項目の抽出を試みる。

B. 研究方法

1. 事前講義

1) 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み

本講義では、環境調整支援の第一層に ICF システムアセスメントによる快適な生活の提供、第二層に学習スタイル・障害特性の考慮による氷山モデルに基づく環境支援：手立て・介入方法、第三層に機能的アセスメントによる行動支援を位置づけ、それら三層が相互補完することの重要性を示した。図 1、図 2 は講義中のスライドで、三層構造の説明と概念図を示したものである。

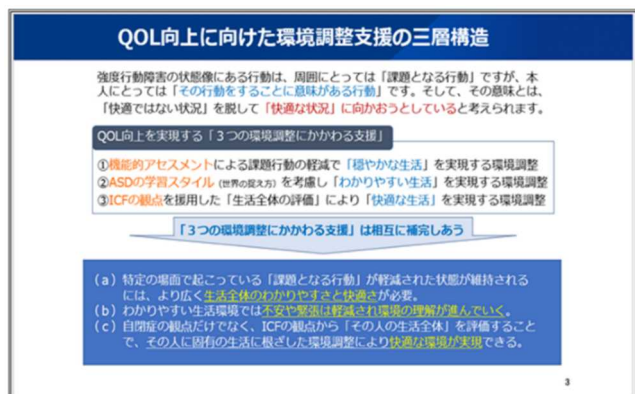


図 1 環境調整支援の三層構造の説明

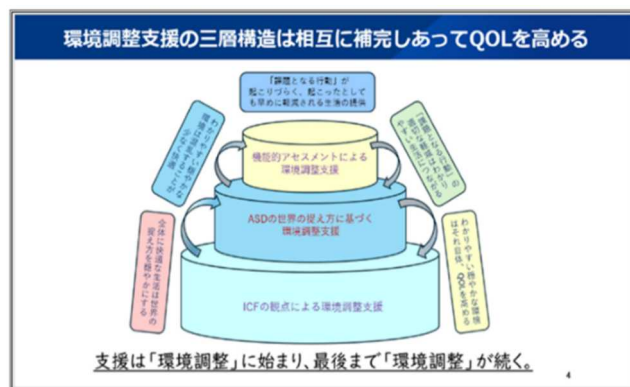


図 2 環境調整支援の三層構造 概念図

続いて本講義では、三層構造の第一層である「ICF による QOL 支援」の説明を行い、1) ICF の概略説明、2) 環境因子と活動と参加それぞれの QOL 支援例と考え方、3) ICF の観点を取り入れた QOL 支援の基本的考え方を伝えた。1) では「知的障害や自閉症といった診断ラベルだけでなく、その障害特性が困難性として現れてくる「活動と参加」そして困難性の発生に影響する「環境因子」という 2 つの観点を合わせて分析していく」ことを強調し、2) の環境因子では環境因子が「人、物、感覚刺激」で構成されることを伝えとともに、支援例として「人」では「適度な大きさの声でゆっくり話しかける」、「物」では「自身の背格好にフィットした椅子と作業机」、「感覚刺激」では「窓からの光を和らげるスクリーン方ブラインド」などを示した。そして環境因子による QOL 支援が「自閉症の人たちにとって快適な環境調整を行えば、彼らも周囲の環境に馴染みやすく、周囲の状況を学んでいきやすい」状況を保証するものであり、それ自体が予防的支援となることを説明した。

次いで 2) の活動と参加では強度行動障害における課題行動の背景には「彼らがより快適な状況に向かおうとする」ことの結果であり、その背景には「日々の活動や参加がご本人にとって負担や困難が大きい状況」があることを伝え、「困難さが軽減される場面や支援の把握が QOL 向上を目指す環境調整支援となる」ことを示した。支援例としては「自立課題をステップごとに超ゆっくりモデル提示すると真似できる」ことに気づくことで、それを日常生活用品の使い方を学ぶ場面に応用し、生活の中での自律性を高める形で QOL を向上させていくことができる、

また「余計な刺激がない方が、作業に集中できる」ことに気づくことで、それを食事の場面に応用して「壁のポスターが見えない席にしたほうが、食事が進む」といった QOL 向上につながるのと説明を行った。さらに活動と参加における QOL 支援では「場面や支援によって活動や参加がどう変わるか」を評価し、「その人に固有の生活に根ざした環境調整支援の実現」が大切であることを強調した。最後に、図3のスライドにより、ICF の観点による QOL 支援を実施する際の留意点を説明した。

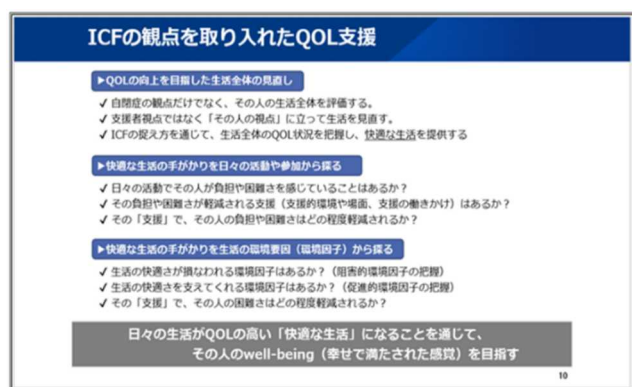


図3 ICF の観点による QOL 支援の留意点

2) ICF システムのデータ入力と分析方法

令和5年度研究で ICF システムによる評価労力の大きさが指摘されており、その対応として、今年度は、三層構造の第2層に対応する「日常生活行動場面アセスメント」（名称：Rainbow）と ICF システムの活動と参加の評価を共有可能な項目について連動させ、日常生活行動場面アセスメントを実施すれば、部分的に ICF システムの評価が行われる仕組みを導入した。環境因子については令和5年度に使用したエクセルシートをそのまま用いて評価を求めた。

「日常生活行動場面アセスメント」と「ICF システムの活動と参加の評価」を一つのエクセルに統合して実現したが、活動と参加の評価結果を ICF システムの5つの支援カテゴリである「強み」「支援維持」「支援修正」「支援考案」「情報なし」に分類するためには、連動版エクセルの「A&P シートに転写用」シートをテキストコピーして、[強行支援 ID] 活動と参加) 6-16y_情報入力シート ver2. 22. xlsx]の「連動版から転写」シートに移す必要があり、さらに、[強行支援_ICF データ分析アプリ_ver1.0. xlsm]を

起動して表示シートに配置されたフォームボタンを押下してマクロを実行して[強行支援 ID] 活動と参加) 6-16y_情報入力シート ver2. 22. xlsx]を読み込んでカテゴリ分類を実行する必要があった。

ICF システムのデータ入力と分析方法の事前講義では、直前の事前講義である「ICF による QOL 支援」で述べた観点で情報を把握しデータ入力すること、日常生活行動場面アセスメントと ICF 項目の連動、エクセルツールの操作を説明した。特に、連動と操作については項目数を減らすために、操作が複雑になったこともあり、各操作ステップを辿りながら説明を行った。

3) ICF システムの情報を QOL 支援に活用する

この講義は、令和5年度では研修の中間時点で行ったものであり、令和5年度の受講者から「研修の最初に試聴したかった」との声があったことから事前講義として行った。

講義では「目指すのは「ご本人の困難さ（生活上のしんどさ）の軽減」であり、ICF による QOL 支援の4つのポイントを伝えた。具体的には、活動と参加では①「強みの活動を他の生活場面で広く活用」するとともに②「支援維持調整」の項目で把握された支援を他の生活場面でも活用する、環境因子では③「促進環境の提供すなわち快適な環境の提供」とともに④「阻害環境の除去すなわち不快な環境の除去」である。次いで、活動と参加の「強み」についてはダウタイム（何もすることがない時間）に強みの活動を導入して短時間の余暇支援を実施する具体例に加え、図4のスライドを例示してこだわり対象の除去に応用する具体例の工夫を伝えた。また「支援

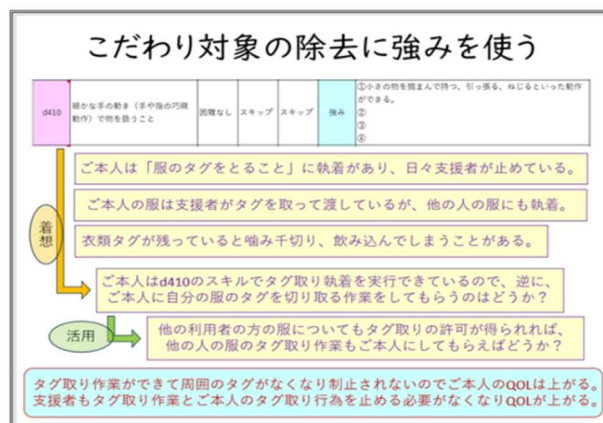


図4 こだわりへの「強み」活用例

維持調整」については所有物を見分けるためのパーソナルカラーの利用、複数物からの選択が容易になるよう提示物の数を減らすなどの支援例を示した。これら「支援維持調整」の支援例は第二層の学習スタイルを考慮した冰山モデルに基づく支援とつながるものであるが、これらの支援例を示すことによって、第2層の支援も QOL 支援につながっているとの説明を加え、ICF 評価の結果として「支援維持調整」の項目が少ない場合には、学習スタイルの分析から導出された支援方法を「適応が悪く QOL が下がっている生活場面」に応用することも強調した。

環境因子については、生活の中で利用者の快適さにつながるものに触れる機会を増やすことが QOL 支援につながることを伝え、「ドリンクの新商品を確認できる機会を増やす」「企業ロゴや広告などの印刷物を破損防止でラミネイト加工して提供する」といった支援例が考えられることを説明した。また、快適な感覚刺激の提供機会を増やすことも QOL 支援につながることを伝え、「日当たりの良い部屋を好んで過ごしている」場合にはそういった場所の提供、「静かな場所では穏やかな表情でリラックスしている」場合には周囲音が下がる工夫が QOL 支援につながることを説明した。また阻害的環境因子の除去も QOL 支援となることを伝え、図5のスライドを例示して、環境因子として把握された情報から着想して活動と参加で把握された情報と組み合わせた QOL 支援を工夫することもできることを説明した。

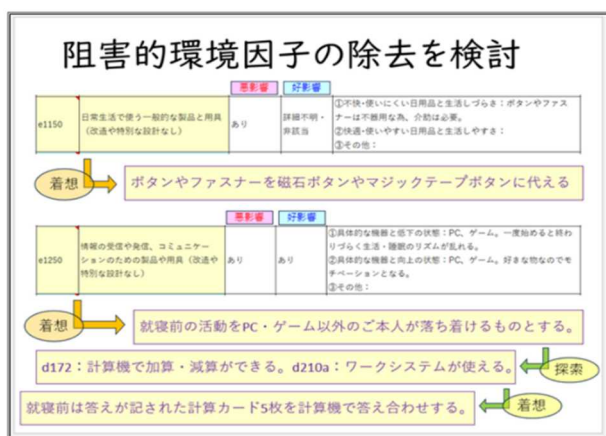


図5 阻害的環境因子を除去する支援

2. ICF システム導入の効果検討

1) 事前講義に関するアンケート

本研修における事前講義は、本稿に記載したものの他に、「標準的な支援と中核的人材養成研修の基本的視点」「自閉症の特性と学習スタイルとアセスメント」「冰山モデル」「チーム支援」「機能的アセスメント」など、本研修で学ぶ強度行動障害支援に係る概念や支援スキルをテーマとする15の講義動画が用意された。事前講義のアンケートはこれら個々の講義動画について、一括したアンケートで各講義視聴期間後の大凡1ヶ月を回答期間として Microsoft Forms によりネット上で行われた。本稿で報告する3つの講義のアンケート実施・回答期間は7月19日から8月26日である。但し、設定期間内に回答が寄せられなかった場合には、その後も回答可能な設定とした。アンケート内容は、各講義動画に係る理解度と改善度である。理解度については「全て理解できた」「一部理解できなかった」「理解できなかった」の三択、改善度については「改善点なし」「改善点あり」の二択でアンケートが実施された。加えて、各講義への意見（自由記述）が設定された。

2) ICF システムによる生活全体の QOL 評価に関するアンケート

このアンケートは「環境調整支援の三層構造」と「ICF システムによる QOL 支援」に焦点を当てたもので、研修実施後に Microsoft Forms によりネット上で行われた。

アンケートは「1. 環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか?」、「2. 「ICF の観点による環境調整支援」は対象者の QOL 向上に大切だと思いますか?」、「3. ICF システムの評価で要支援者にとって快適ではない生活場面を把握できましたか?」、「4. ICF システムの評価で要支援者に快適な生活を提供する手がかりは得られましたか?」、「5. 「ICF の観点による環境調整支援」を実際に行うことができましたか?」、「6. ICF システムによる生活全体の QOL 評価は日々の支援の中で使っていけると感じますか?」、「7. 生活全体の QOL 評価で用いた ICF システムについて今後改善すべき点があれば教えてください。」の7つで構成され、

7を除く6つの設問について四択のリッカート選択肢を付し、1,2,6,7についてはそれぞれ、3,4,5については3設問全体の回答に対して、その回答理由の自由記述を求めた。リッカートの回答選択語は、設問に応じて、設問1,2,6は「[そう思う、多少そう思う、あまり思わない、思わない]とし、設問3は「[把握できた、多少把握できた、あまり把握できなかった、把握できなかった]」、設問4は「[得られた、多少得られた、あまり得られなかった、得られなかった]」、設問6は「[できた、多少できた、あまりできなかった、できなかった]とした。

3) 研修前後のICFフォームの検討

令和5年度同様、研修での学びを通じた実践効果を可視化するためにICFの相互関連図の各要素（健

康状態、心身機能構造、活動・参加、環境因子、個人因子）をスライド1枚に配置したICFフォームに研修の事前事後でそれぞれ、研修にかかる実践のモデル利用者の概要をまとめて記載し、事後については、事前からの変化箇所を赤字で記載することを求めた。

ICFフォームの活動と参加および環境因子には令和5年度と同様に「QOLに影響している項目を選定する」との指示が記載されており、QOL支援を念頭に、モデル利用者の概要を把握・記載するフォームとなっている。図6aに示すのは、事前用ICFフォームの記載例（モデル利用者の概要（プレ））である。図6bは事後用（ポスト）の記載例である。

研修前後のICFフォームの検討では、全事業所に

モデル利用者の概要（プレ）		※記載例
健康状態 重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、朝起きられない		
心身機能・構造	活動・参加（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定	
- 作業に取り組めない（実行機能の問題） - 物の位置が気になる（ルール学習の強さ） - 生活関連刺激の苦手さ（感覚特性、独特な注意） - 対人刺激の苦手さ（社会的認知、感覚特性？） - 見て学習することが得意（暗黙的学習の難しさ）	（強み）記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】（絵や写真は理解できる） （強み）まねをして学ぶこと【d130】（見て学ぶことができる） （支援修正）一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】 困難あり：何をしようかわからない、作業に取り組むことができない 支援あり：プレハブでワークシステムを用いてパズル→余暇（漫画）のスケジュール実施 効果小：活動に取り組むことができるが、24時間365日マンツーマン対応で持続困難 （支援修正）場面に応じた行動のコントロール【d250】 困難あり：他利用者の物の置き方が気に入り、他者への暴力行為あり 支援あり：24時間365日マンツーマンによる見守り支援 効果小：支援員の制止で暴力行為に至らないが、ご本人のQOLは上がらず、24時間365日マンツーマン対応で持続困難 （支援参考）基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】 困難あり：GHの共用スペースで他の利用者と関わるスキルがない。加えて、他利用者への暴力行為があり制止される。 支援なし：支援員の関わりは暴力の制止のみにとどまっている。（ご本人のQOLは上がらず、本2項目には効果なし）	
環境因子（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定		個人因子
- 阻害環境：共用スペースでの生活（【e240,250,260等】生活関連刺激や対人刺激【d710,750】への苦手さ？） ：睡眠薬【e110b】 - 促進環境：ワークシステム（【e1351】仕事のしやすさを支援する製品と用具） ：生活介護事業所でのプレハブ設置（生活関連刺激や対人刺激の除去） ：職員3名で交代しながらの個別対応（【e340,440】）		50代男性・障害支援区分6 - 行動関連項目12点 - 発達年齢4歳3か月 - グループホーム（5人暮らし） - 生活介護事業所に通所

図6a ICFフォーム（プレ）の記載例⁴⁾

モデル利用者の概要（ポスト）		※記載例	変更箇所を赤字にしてください
健康状態 重度知的障害、ASD、てんかん、便秘傾向、 朝起きられない			
心身機能・構造	活動・参加（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定		
- 作業に取り組めない（実行機能の問題） - 物の位置が気になる（ルール学習の強さ） - 生活関連刺激の苦手さ（感覚特性、独特な注意） - 対人刺激の苦手さ（社会的認知、感覚特性？） - 見て学習することが得意（暗黙的学習の難しさ）	（強み）記号やシンボル、絵や写真の理解【d3151-2】（絵や写真は理解できる） （強み）まねをして学ぶこと【d130】（見て学ぶことができる） （維持調整←支援修正）一つの作業や活動を一人ですること【d210a】、問題を解決すること【d175】 困難あり：何をしようかわからない、作業に取り組むことができない 支援あり：パーティションで空間を仕切った共有スペースで、スケジュール・ワークシステム・手帳を用いて支援 効果大：共有スペースでも他利用者を気にすることなく、活動に取り組むことができた。<u>ご本人のQOLも向上。</u> また、持続的なチーム支援が可能になった （維持調整←支援修正）場面に応じた行動のコントロール【d250】 困難あり：物の置き方が気に入り、他者への暴力行為あり 支援あり：物の位置を写真で提示 効果大：物の置き場で困らなくなった、支援員が常につきずとも暴力行為がなくなった。<u>ご本人のQOLも向上。</u> （維持調整←支援参考）基本的な対人関係【d710】、非公式の対人関係【d750】 困難あり：GHの共用スペースで他の利用者と関わるスキルがない。加えて、他利用者への暴力行為があり制止される。 支援あり：共用スペース空間をパーティションで仕切った。（生活関連刺激や対人刺激の低減） 効果大：他の利用者と関わるようになってはいるが、暴力行為はなくなった。<u>ご本人のQOLも向上。</u>		
環境因子（※ICFシステム項目・補足情報参考）：QOLに影響している項目を選定		個人因子	
- 阻害環境：共用スペースでの生活（【e240,250,260等】生活関連刺激や対人刺激【d710,750】への苦手さ？） ：睡眠薬【e110b】（全体支援で行動が落ち着いたら眠気が取れない）→減薬で眠気消失 - 促進環境：ワークシステム、スケジュール、手帳、パーティション、置き場の整理（物の位置を決めて写真で提示）（【e1351】仕事のしやすさを支援） ：生活介護事業所でのプレハブ設置（生活関連刺激や対人刺激の除去） ：職員3名で交代しながらの個別対応（【e340,440】） ：共用スペース空間を（パーティションで）仕切って生活（【e151】日常生活での使いやすさを支援）		50代男性・障害支援区分6 - 行動関連項目11点 - 発達年齢4歳3か月 - グループホーム（5人暮らし） - 生活介護事業所に通所	

図6b ICFフォーム（ポスト）の記載例⁴⁾

ついて事後の ICF フォームを総覧して QOL 支援の観点が明確に読み取れるものを抽出する。その際、実践報告の記載も参照して ASD 特性と環境のミスマッチを解消する環境調整支援だけでなく、生活における快適さの向上が読み取れる支援を特に抽出することを考慮する。そして ICF フォームにおける事前事後の変化を確認するとともに、当該の支援の QOL 向上における意味合いとその効果をまとめる。加えて、これら抽出された事業所について 2) の「ICF システムによる生活全体の QOL 評価に関するアンケート」に示される回答状況を分析する。

4) ICF 評価結果の分析に基づく強度行動障害に特化した ICF 項目の絞り込み

a) 活動と参加の評価結果と強度行動障害支援に特化した項目の絞り込み

本研修では、ICF システムの評価を研修の事前と事後に行っている。活動と参加の評価は先に述べた 5 つの支援カテゴリーで分類できるため、活動と参加 67 項目のそれぞれについて、受講事業所の評価を支援カテゴリーごとにカウントする。その結果に基づいて支援カテゴリー別に評価数の項目順位を示す。このことによって強度行動障害支援において評価対象となりやすい活動と参加項目と評価から外れる活動と参加項目を把握する。

さらに、事前と事後の評価の変化を調べて、事前評価よりも事後評価が向上している項目、逆に低下している項目を明らかにする。このことによって、強度行動障害支援において、支援効果が現れやすい ICF 項目と効果が現れづらい ICF 項目が示される。

以上の第一次分析結果に基づいて、最初に強度行動障害支援に感度の高い項目を絞り込む。絞り込みに際しては「強み」「支援維持」「支援修正」の 3 つのカテゴリー評価となりやすい項目について、事前評価と事後評価のそれぞれで評価順位の高い項目を比較検討し、全体として評価対象となりやすいだけでなく、支援の手がかりが得られやすい項目を選定する。次に、この選定結果に、事前事後の評価値変化分析により改善効果が見られやすい項目とそうでない項目を対応させて「評価対象となりやすく、支援の手がかりが得られやすく、改善効果の見られや

すい項目」を絞り込む。以上の分析手順によって、強度行動障害支援に特化した ICF 項目をリストアップして暫定第一案とする。さらに、「支援考案」の評価を受けやすい項目、すなわち支援現場で支援の必要性はあるが支援ができていない状況となりやすい項目を選定する。その中から、強度行動障害支援に重要と思われる項目を選定して、暫定第一案に加え、暫定第 2 案の活動と参加項目リストを作成する。

最後に、令和 3 年度に分担研究者が代表を務めた挑戦的研究（萌芽）「ICF に基づく情報把握共有システムの発達障害支援における実践検証と活用方法の検討」で実施した「強度行動障害の QOL 支援における有用性調査」（未公表）の結果を、暫定第 2 案と対応させ、R3 年調査結果で高い有用性評価を得た項目を第 1 選定項目群に、その次の有用性評価を得た項目を第 2 選定項目群とする。ところで令和 3 年度調査とは、強度行動障害支援を行っている事業所 15 箇所を対象に、活動と参加および環境因子のすべての項目について強度行動障害の QOL 支援における有用性を「有用である＝1 から有用でない＝5」の 5 段階で評定してもらい、評定値平均が 1.0 以上 2.0 未満を第 1 選択群、2.0 以上 2.5 未満を第 2 選択群、2.5 以上を第 3 選択群としたものである。

今回の研究でも強度行動障害支援に特化した ICF 活動と参加項目リストを第 1 選定群、第 2 選定群と 2 段階構成に割り付けるが、これは強度行動障害者の多様性を包括した評価を可能とするため、第 1 選定群を必須評価項目、第 2 選定群を利用者の状態像に応じた評価項目とするためである。また、第 1 選択群と第 2 選択群を設定するに際しては強度行動障害支援に係る重要性を考慮して項目数の調整を行う。

b) 環境因子の評価結果と強度行動障害支援に特化した項目の絞り込み

環境因子についても、研修前後で事前評価および事後評価を行っている。環境因子の評価は、周囲の人達の環境因子と人以外の環境因子について行っているが、評価結果の分析は人以外の環境因子について行う。周囲の人達については、強度行動障害の人たちが生活の中で関わりを持つ対象者が比較的限定されているため、令和 3 年度調査結果を考慮して絞

り込みを行う。

人以外の環境因子は「第1章 製品と用具」「第2章 自然環境と人間がもたらした環境変化」「第5章 サービス」の3カテゴリー全26項目であり、これに第3章と第4章に属しているが直接の人ではない2項目（e460 団体やグループの障害観、e465 社会全体の価値観、習慣、慣行、宗教教義など）を加えた28項目を分析対象とする。これらの項目については生活に対する阻害・促進、阻害のみ、促進のみ、影響なし、情報なしの5つの支援カテゴリーで評価するため、人以外の環境因子28項目のそれぞれについて、受講事業所の評価を支援カテゴリーごとにカウントする。その結果に基づいて支援カテゴリー別に評価数の項目順位を示す。このことによって強度行動障害支援において評価対象となりやすい環境因子項目と評価から外れる環境因子項目を把握する。

次に事前と事後の評価の変化を調べて、事前と事後の両評価に促進評価が含まれる項目、事後にのみ促進評価が含まれる項目を選定することで、生活機能の促進に関与する環境因子を把握する。把握された項目の中には阻害・促進項目も含まれるため、純粋に促進のみの項目ではないが、促進の影響を有する環境因子項目を広く把握することができる。また、事前事後とも阻害のみおよび事後で阻害のみの評価に変化した項目を選定することで、生活機能の阻害に関与する環境因子を把握する。把握された全項目は、事後に阻害のみとなっているため、これらの項目は研修終了時点で阻害のみと評価された環境因子項目である。

以上の分析結果に基づいて、最初に強度行動障害支援に感度の高い項目の絞り込みを行う。絞り込みに際しては「阻害・促進」「阻害」「促進」の3つのカテゴリー評価となりやすい項目に絞って、事前評価と事後評価のそれぞれで評価順位の和を求めて、再度、事前・事後の評価を総合した評価順位を確認する。和を求めた理由は、生活機能への各環境因子の影響度を把握するため、活動と参加の手順とは異なり、事前・事後順位の単純和で絞り込みを行う。次いで「影響なし」「詳細不明」についても同様の手順で絞り込みを行う。次に、この選定結果に、事前

事後の評価値変化分析により事前・事後に促進評価を含む項目と事前事後とも阻害のみおよび事後に阻害のみの項目を対応させて「評価対象となりやすく、促進あるいは阻害の影響を与えやすい項目」を選定するとともに、強度行動障害支援の大きな背景要因と考えられる「第5章 サービス」の項目を除外し、暫定第1案の環境因子項目リストを作成する。

最後に、令和3年度の本研究で実施した活動と参加項目全体に対する「強度行動障害のQOL支援における有用性調査」の結果を、暫定第1案と対応させ、R3年調査結果で高い有用性評価を得た項目を第1選定項目群に、その次の有用性評価を得た項目を第2選定項目群とする。周囲の人の環境因子については強度行動障害支援における重要性を考慮して項目を選定してリストに加えた。

なお、強度行動障害支援に特化したICF環境因子項目リストを第1選定群、第2選定群と2段階構成にするのは、強度行動障害者の多様性を包括した評価を可能とするため、第1選定群を必須評価項目、第2選定群を利用者の状態像に応じた評価項目とするためである。また、第1選択群と第2選択群を設定するに際しては強度行動障害支援に係る重要性を考慮して項目数の調整を行う。

■ 倫理面への配慮

調査の手続きについては、国立のぞみの園調査研究倫理審査委員会で承認を得た（承認番号05-07-01、06-09-03）。

C. 研究結果

1. 事前講義の評価アンケート

1) 事前講義の理解度と改善度

本アンケートの回答数は141で、参加事業所数が141であるため、回答率は100%であった。本稿に係る事前講義は講義群全体の3番目に位置づくもので、「③-1 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み」「③-2 ICF活動とシステムのデータ入力と分析方法」「③-3 ICF活動とシステムで把握した情報をQOL支援に活用する」の3つである。

講義③-1に対する理解度の結果は「全て理解でき

た 73.9%、一部理解できなかった 23.9%、理解できなかった 0.7%」であった。改善度については「改善点なし 79.6%、改善点あり 19.01%」であった。講義③-2 に対する理解度の結果は「全て理解できた 19.7%、一部理解できなかった 71.1%、理解できなかった 5.6%」であった。改善度については「改善点なし 64.8%、改善点あり 32.39%」であった。講義③-3 に対する理解度の結果は「全て理解できた 52.1%、一部理解できなかった 71.1%、理解できなかった 5.6%」であった。改善度については「改善点なし 93.0%、改善点あり 7.04%」であった。

2) 各講義への意見概要

意見概要については、各講義について「よかった点」および「改善点」を抜粋して示す。

講義③-1 のよかった点は「強度行動障害の方に対する QOL 支援の視点を明確に提示してくれたこと」

「本人視点から考える大切さ」であり、改善点は「3 層構造について、簡単な支援の具体的な内容が示されていないと、それらの支援の経験がない受講者にはイメージができない可能性がある。ICF の解説をしてほしい。」であった。講義③-2 のよかった点は「全体像を把握できたのがよかった」「分析のヒントになった」であり、改善点は「データ入力の方法が複雑で理解するのが難しい。静止画ではなく動画で説明があったらいい。一回の講義だけで理解できない」であった。講義③-3 のよかった点は「QOL 向上の 4 つの視点を通して、対象者を見ること、ポジティブな視点を学ぶことができた」「詳細なアセスメントができる」であり、改善点は「シートを打ち込みながらや記入事例の提示があるとよかった。実際に事業所で他の人に作成してもらうことが難しさを感じる。」であった。

2. ICF システムによる生活全体の QOL 評価に関するアンケート

1) 設問 1「環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか？」

図 7 に示すように、「そう思う」が 81.1%、「多少そう思う」が 16.7%であり、97.8%が肯定的な回答であった。また「思わない」の回答は 0%であった。

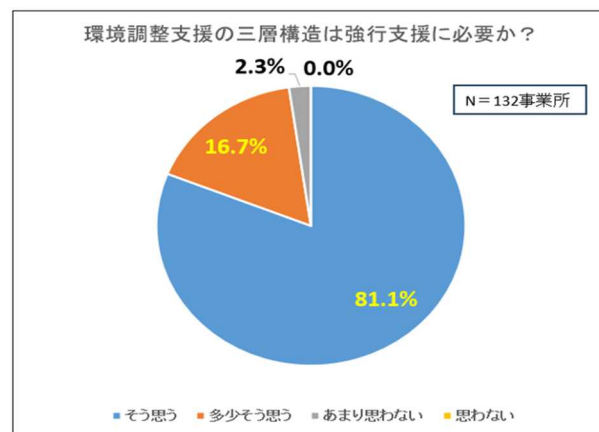


図 7 設問 1 の結果

次に回答の理由を「そう思う」の回答と「あまり思わない」の回答から抜粋して示す。

a) 「そう思う」の回答理由 (抜粋)

①「ターゲット行動に対する機能分析からのアプローチ事例が多く、そもそもの本人主体の幸せ・豊かさの観点が抜け、目指すべき方向が定まらず、その場しのぎのアプローチになりがち。(フォローアップの際に、“その場で過ごす支援”を目の当たりにし、“何のための支援か?”を考えさせられた。)三層に分けて考えることでわかりやすいと思った。」

②「冰山モデルやストラテジーシートは支援でよくもちいられるが、主に他害行為や自傷行為での問題解決として使用されるが、表現は悪いが「手のかからない」(何もしない・ただ座っている等の)ご利用者様に対する ICF の考え(参加や活動に対する視点)もご利用者様の QOL 向上には必要な観点と思うため。」

③「以前より強度行動障害の方の状態緩和や状態憎悪予防の為に TEACCH プログラムの考え方や ABA の考え方は活用させて頂いていましたが、それが実質的に当事者の生活の質向上につながっているかについて十分な説明を行えていなかった様に思います。その意味では ICF シートの視点は今後当事者生活の質の向上を検証する為に有効な手立てとなる可能性を感じました。」

④「現場ではどうしても目の前にある困っている行動に対するアプローチが主題となりがちなので、三層構造の捉え方は、より QOL を意識するアプローチが出来る手立てとなりました。」

⑤「ICF の観点による環境調整支援(QOL)視点が大切。行動障害がなくなること、支援者の指示に従える

ことが目的となりかねない為。」

⑥「自閉スペクトラム症の特性だけに着目した支援ではなく、まずは人としての安心・安全が優先されることでQOLを向上させる土台や基盤が整備されることにつながると考えるため」

⑦「実際に三層にあてはめて支援を考えていった際に、これまで見ていなかった特性や能力に着目することができ、新たな視点での支援方法が見つかり、有益な環境調整ができたと感じたため。」

b) 「あまり思わない」の回答理由（抜粋）

①「この3層を理解できる人が現場にどれくらい居るのか疑問。ICF システムの項目の多くがポジティブな評価であったとして、それがQOLが高い状態であると言えるかは議論の余地が多くあるように思われる。支援哲学の一形態に過ぎないとも思う。」

②「それぞれ”環境調整支援”となっているところにも疑問がある。行動障害のある人への支援は環境調整だけではなく（環境調整による成果は絶大であるが）、望ましい行動や社会のルール、人との関り方を”教える”というアプローチも重要であると認識している。学習するための環境を調整するということは言えるが、それでも学習することがあるというのが前提である。行動障害のある人たちに、『何を教えるか』といった視点も合わせて持ちたいと思う。」

2) 設問2「ICFの観点による環境調整支援」は対象者のQOL向上に大切だと思いますか？

図8に示すように、「そう思う」が87.1%、「多少そう思う」が11.4%であり、98.5%が肯定的な回答であった。また「思わない」の回答は0%であった。

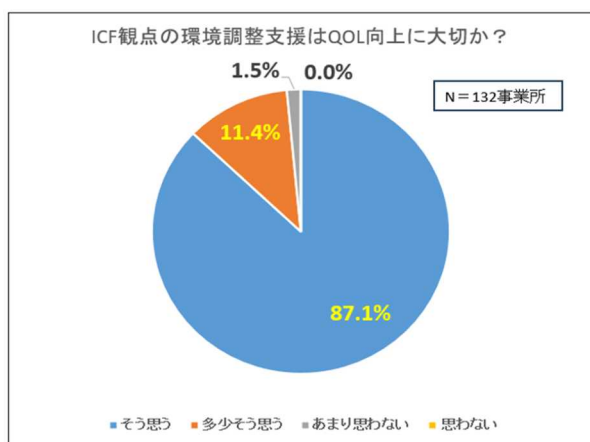


図8 設問2の結果

a) 「そう思う」の回答理由（抜粋）

①「支援者はともすれば自らが携わる支援環境の中でのみ支援を組み立てることに終始してしまっているのではないかと、生活の範囲を支援者が決定してしまっているのではないかと、などと気付かせてくれるものでした。」

②「QOL向上を考えると、対象の方の能力・機能だけを見るのではなく、対象の方の物理的環境や人的環境が相互に影響していることも視点に入れる必要があると思います。」

③「従来、私たちの施設では行動障害の緩和にばかり焦点が当てられ、生活全体を評価する視点に乏しかった。快適な生活を提供するにあたり、ICFの観点による環境調整支援は重要になると考える。」

④「支援に苦勞する事業所ではどうしても「自分たちが困る」視点であったり、「自分たちが助かる」形へシフトしがちになるので、主役・主体が誰であるのか、「困っているのはだれか」を考えていくために大切だと思う。」

⑤「特性に対する支援対応や配慮は、ご本人に適應するものとししないものがある事から」

⑥「快適環境の提供、困難さの軽減の両方において、利用者の特性や状態像に責任を求めている。現場実践の中では利用者のQOL視点よりも課題行動の除去に目が向きやすい。しかし、分かりやすく、過ごしやすい環境を準備することで課題行動は課題ではなく強味になったり、行動が落ち着いて新たなストレングスに気づくことが出来る。ICFの観点ではそうしたことが分かりやすくまとめられている。」

⑦「ICFで利用者の「活動と参加」と「環境因子」を掘り下げて考察した結果、本人の課題行動の予防への新たなアプローチが見つかり、対症療法だけで対応していた支援方法が変わったため。」

⑧「ICFの観点で、対象の方の生活全体を把握、評価することで、特に言葉のない方や意思表出が少ない方の状態や思いへの理解に繋がると感じています。また、全体を把握し調整することで、結果的にQOLは向上すると感じています。」

b) 「あまり思わない」の回答理由（全）

「重度のかたには該当しない設問が多く判断しに

くい」

①「ICF システムの項目の多くがポジティブな評価であったとして、それが QOL が高い状態であると言えるかは議論の余地が多くあるように思われる。」

3) 設問 3 「ICF システムの評価で要支援者にとって快適ではない生活場면을把握できましたか？」

図 9 に示すように、「できた」が 35.6%、「多少できた」が 52.3%で、87.9%が肯定的な回答であった。「できなかった」が 0.8%であった。

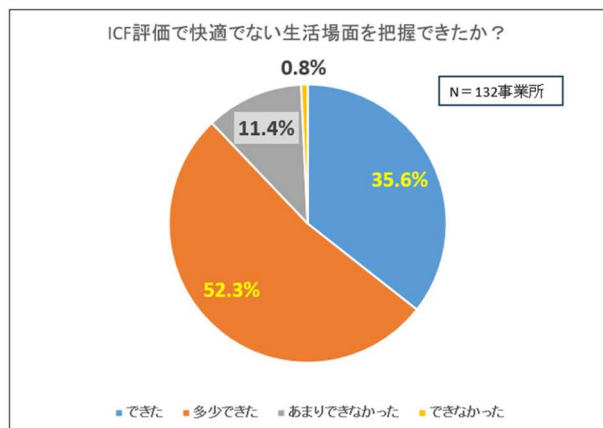


図 9 設問 3 の結果

4) 設問 4 「ICF システムの評価で要支援者に快適な生活を提供する手がかりは得られましたか？」

図 10 に示すように、「できた」が 29.5%、「多少できた」が 59.1%で、88.6%が肯定的な回答であった。「できなかった」は 0.0%であった。

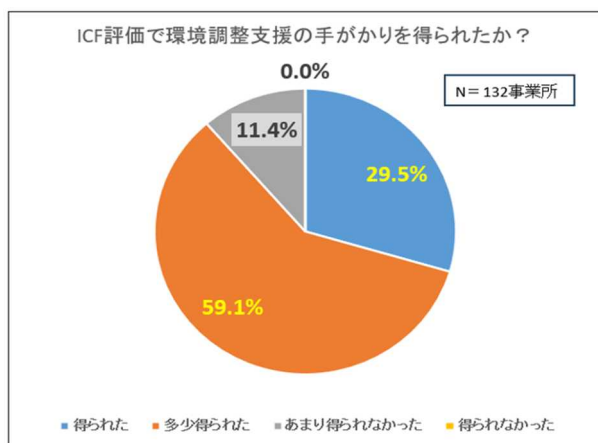


図 10 設問 4 の結果

5) 設問 5 「ICF の観点による環境調整支援」を実際に行うことができましたか？」

図 11 に示すように、「できた」が 18.9%、「多少できた」が 59.1%で、78.0%が肯定的な回答であった。「できなかった」は 0.8%であった。

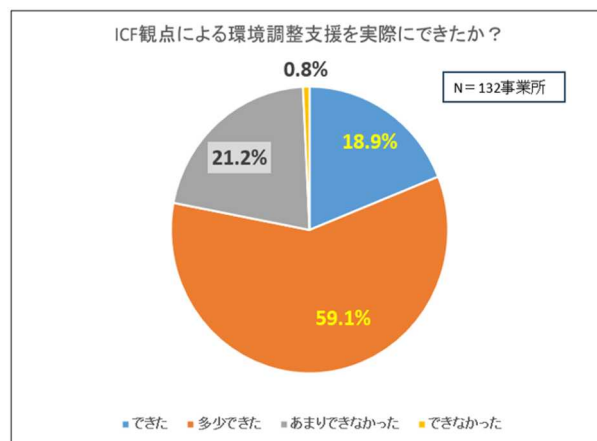


図 11 設問 5 の結果

6) 設問 5 の回答による 3 設問の回答タイプ

a) 「できた・多少できた」に係る回答タイプ

表 1 に示すように、8 種類の回答タイプが認められた。主な回答タイプでは「把握できた・得られた・できた」(type01) が 16 回答、「把握できた・多少得られた・多少できた」(type05) が 17 回答、「対照できた・多少得られた・対照できた」(type08) が 44 回答であった。

回答type	設問3	設問4	設問5	回答数
type01	把握できた	得られた	できた	16
type02	多少把握できた	多少得られた	できた	7
type03	把握できた	得られた	多少できた	17
type04	把握できた	多少得られた	多少できた	8
type05	多少把握できた	得られた	多少できた	3
type06	多少把握できた	多少得られた	多少できた	44
type07	あまり把握できなかった	多少得られた	多少できた	2
type08	あまり把握できなかった	あまり得られなかった	多少できた	4

b) 「あまりできなかった」に係る回答タイプ

表 2 に示すように、8 種類の回答タイプが認められた。主な回答タイプでは「あまり把握できなかった、あまり得られなかった、あまりできなかった」(type02) が 6 回答、「多少把握できた、多少得られた、あまりできなかった」が 11 回答であった。

回答type	設問3	設問4	設問5	回答数
type01	把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type02	あまり把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	6
type03	あまり把握できなかった	多少得られた	あまりできなかった	3
type04	多少把握できた	あまり得られなかった	あまりできなかった	3
type05	多少把握できた	多少得られた	あまりできなかった	11
type06	把握できた	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type07	把握できた	多少得られた	あまりできなかった	1
type08	把握できた	得られた	あまりできなかった	2

7)設問5の回答が「できた・多少できた」に係る
主な回答タイプの回答理由

a) type01 回答 (把握できた・得られた・できた)
の回答理由 (抜粋)

①「ICF システムの評価で対象児童の生活を細かく分析することができたため、できていること、芽生えていること、難しいことを、項目ごとに把握することができた。特に、難しいことについては、本人の特性に合わせて、何が難しくさせているのかを考えて、難しくさせている刺激などを除去し、できていることをうまく利用し、特に視覚化や見通しを伝えて、活動を繰り返し、成功体験を積むことで、落ち着いて取り組むことができるようになった。」

②「作業場面において、嫌刺激となる音や声、視覚的に気になるものがあることで課題行動に繋がっている事がチーム全体で把握できた。他利用者と活動時間をずらす、場面と活動の一对一対応を徹底し、細部への注目の強みを活かし、環境調整を行った。結果として課題行動は無くなり、作業、活動に集中できるようになり、生活のリズムにも好循環を生んだ。」

③「聴覚過敏かなと思っていたが、調べていくうちに、特定の利用者の動きや声が気になっていることがわかったり、集中できる個別課題や、ヘッドフォンを使用してのテレビ鑑賞など今まで行えていなかった支援を取り入れる事ができた。」

④「整理することにより、ICF の観点を持って支援を考えることが多くなった。」

⑤「ICF の観点による環境調整支援を行ったことにより、利用者へのアプローチが変わったことと利用者もストレスがなくなりつつあり課題行動の減少に繋がったため。」

b) type03 回答 (把握できた・得られた・多少できた) の回答理由 (抜粋)

①「ICF シートで色々な観点から探っていくことで、それをもとに QOL を向上させるための手立てを考えて実施することができたため。」

②「当施設は、ASD の方に対して、支援者が指導的な考えで接していない (ASD の方のペースを尊重している) のは、ICF の評価から良くわかった。その分、

ASD の方の余暇活動が下がるという結果が出ており、「支援者の支援での価値観」が良くわかり、支援の変更点も良くわかった。」

③「感覚の過敏さなど、本人にしか分からない事があると思う。支援者の価値観ではなく、本人の感覚や価値観に合わせた支援が大切だと感じたから」

④「項目が細かかったので、それに回答していくことにより、今まで気づけなかったことに気づき、支援に取り入れることができたから」

⑤「対象となる児童に必要な環境調整として換気扇やプロペラに対する興味がご本人の衝動的な行動につながることをチームで確認できたため、適切に興味の対象に触れてもらう環境調整は行ったが、通院や買い物などを含め、生活上でそれら全てを取り除くことは現実的に困難であるため、完全に環境を調整するには至っていないため。」

c) type06 回答 (多少把握できた・多少得られた・多少できた) の回答理由 (抜粋)

①「ICF の観点で考えるのは重要で、理解できたが、今回の研修では重点的に取り組むことができなかった。冰山モデルやストラテジーシートが行動によりつなげることができると考えてしまったためである。そのため、来年度も取り組み、実践し、理解を深めたい。」

②「支援導入後の ICF 検証のところで「支援なし」⇒「効果小」になりました。これから更に支援の更新を図る必要を感じました。」

③「本人にとっての不快な刺激除去や新たな体験や経験ができるように取り組めたから。問題行動の減少が見られたから。」

④「ICF の観点から、何を分かっている、何を分かっているのかを細かく整理ができたため、その視点を元に支援を組み立て実行することができた。」

⑤「初めて行う内容で上手く取り組めたとは思わないが、取り掛かる事は出来たと思う。」

⑥「今回の研修では、アセスメント・ICF シートを活用させてもらったが、記入をおこなっていくにあたってアセスメントを深めることは実感できたが、それらのシートをどのように活用するのか、研修の組み立てとして、どのように繋がっていくのが理

解しづらかった。」

⑦「自分自身が、ICF システムの活用経験が積み重なっていないため、十分な成果を得られたかどうか判断に迷うため。しかし、支援者自身の意識向上にはつながっているため、一定の成果はあったように感じています。」

⑧「情報量が多すぎる。分析に至るまでの時間がかかりすぎる。時間コストのわりには整理されたものは分かりにくい。実践においては、環境調整の限界もあり悩ましさは残る。ただ、ICF シートで情報を整理する過程で拾っていなかった情報を拾うこともできた。」

8) 設問 5 の回答が「あまりできなかった」に係る主な回答タイプの回答理由

a) **type02 回答** (あまり把握できなかった・あまり得られなかった・あまりできなかった) の回答理由 (抜粋)

①「他のシートの方が使い慣れているためそこから分析支援をおこなった。」

②「ICF システムの評価システムが難しく、理解も追いつけなかったため、それを活用することがあまりできなかった。」

③「中核的人材養成研修においてアセスメントシートが多く、膨大な量から活用できるアセスメント項目を絞っていくには相当の時間を要するから。」

④「設問が多くどこから取り組んでいけばよいのかが分からず優先順位がつけられなかった。」

b) **type05 回答** (多少把握できた・多少得られた・あまりできなかった) の回答理由 (抜粋)

①「ICF システムは初めて得た知識で運用するには知識と経験が必要であると考えます。」

②「わざわざ ICF システムで評価せずとも、普段から本人を観察したりスタッフ間でやり取りすることで、本人の強み・弱みやスキルを把握していれば、QOL の向上に役立てることができる。」

③「質問項目や連動する項目が多く、自分自身が整理してつかむことが難しかったから。環境調整に関しては学習スタイル等の特性、氷山モデル、ストラテジーシート中心で考えたから。」

④「ICF の視点は重要ですが複雑すぎると感じています。」

⑤「この項目には、どんなことを記入すればいいのかが分からない部分があり、もっと記入が出来ていれば活用が出来たと思う。」

9) 設問 6 「ICF システムによる生活全体の QOL 評価は日々の支援の中で使っていけると感じますか？」

図 12 に示すように、「そう思う」が 27.3%、「多少そう思う」が 57.6%で、84.9%が肯定的な回答であった。「思わない」は 3.8%であった。

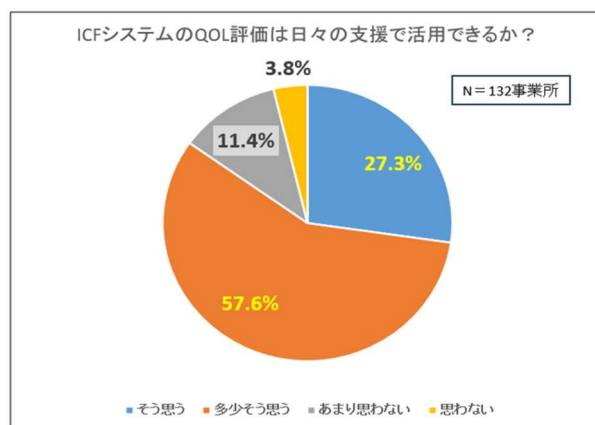


図 12 設問 6 の結果

a) 「そう思う」の回答理由 (抜粋)

①「生活の質という大きな枠組みについて、詳細にアセスメントすることができ、支援の前後の変化を追うことができるため、有意義な評価システムであると思います。このアセスメントの分量は支援の中では必要であり、またこれらを実施することで支援者側の視点やスキルの向上につながるものであると思う一方で、アセスメントの分量が多岐にわたるため、アセスメント自体はそれほど負担ではありませんが、アセスメント後の入力作業に時間がかかるため、やや負担感があることも否めません。」

②「生活の中で自身の好みに合わせた生活空間の提供や活動を実施し、QOL の向上において個別的な視点を取り入れられた。また、個別的な取り組みを行う中で QOL の向上のみでなく、行動障害の緩和にもつながった。今回の件を好事例とし、他利用者にも同様の取組みを行うことができると考える。」

③「対象者様と周囲の関係を探るうえで使っていけると感じました。」

④「一つの問題行動が減少しても生活全体を見渡した時、まだまだ問題行動の芽となる環境があるので QOL 評価を参考にしてより過ごしやすく向上できる支援を常に模索していく必要がある。」

⑤「今回の事例をもとにすれば実用可能と考えられる。アセスメントが細かい分運用に時間が掛かる可能性は感じます。」

⑥「ここまで細かく対象者の QOL 評価をしたことはなかったが、この評価により本人の強み弱みが理解できるので強みは生活の中に活かし、弱みについてはサポートをするという支援の組み立てが出来るから。」

⑦「その人の生活を考える際、障害だけで考えないことの重要性を理解することができたため」

⑧「評価がカテゴリー分けされ、分かりやすい。支援の工夫につながり、強みを活かした支援に結び付けられると感じる。」

⑨「ICF シートにまとめることで強みや課題点が明確になり、支援の組み立てには有効だと思いました。」

b) 「思わない」の回答理由（抜粋）

①「複雑すぎて量が多すぎる。支援現場の人材や体制に課題が多く、この手続きを踏まないと行動障害の支援ができないと捉えられ、行動障害への取り組み事態が高いハードルとなる。」

②「ICF の視点を持つことはとても重要です。そのため、この視点を中核的人材に必要かと思います。ただ、このアセスメントシートは複雑すぎることで、量が多すぎて現場では使えない状況です。ICF の視点の講義くらいでとどめるのかアセスメントシートをもっと簡易的なものにするのか検討いただけると幸いです。」

③「考え方としては大切であるが、別のシートに情報があれば、ICF システムを使用しなくても QOL 評価はできる。また、ICF システム自体がわかりにくく、使いづらいと感じるため、わざわざ使いたいと思わない。ただ、ケース検討会などで複数の人間と情報を共有する際に ICF シートで情報をまとめることは有効であり、その際に ICF システムを活用することは有効だと思う。」

④「実施コストが高く、これをアセスメントできる職員を育てることが現実的ではない。」

10) 設問 7「生活全体の QOL 評価で用いた ICF システムについて今後改善すべき点があれば教えて下さい。」

136 の回答総数中「改善点は特になし」旨の回答数は 43 で 31.6%であった。その中には「これだけ多くの視点で評価をしていくことが大切であることを学びました。」「一利用者に対して理解するにはこのくらいの量は本来必要だったと考えるきっかけとなりました。この形で良いと思います。」「ICF 自体の考え方が浸透し、より短時間で環境面の調整に目を向けられると支援の充実につながると感じる。」などの回答が認められた。

以下、設問 6 の回答が「そう思う」の場合と「あまり思わない・思わない」の場合に分けて、当設問の自由記述回答を示す。

a) 設問 6 が「そう思う」に係る回答

①「やはり打ち込みに際して負担感が否めません。特に負担になるのは、アセスメントと言うよりも、アセスメント入力の作業だと感じます。今回は、エクセルシートでの打ち込みでしたので、よりユーザビリティを高めて、打ち込みがわかりやすく、分析もしやすいアプリケーションパッケージになると、負担感は劇的に減ると思います。そうなると、かなり有益な評価システムになると思いました。」

②「入力がもう少し簡易になり、ボタン切り替えで多面的な評価が見られて活用のための出力が出来るようになると、ありがたいなと思います。全てのライフステージに対応できるようになれば良いと思います。」

③「簡素化できるところがあるとさらに良くなると思う。」

④「入力項目ごとに、必要なアセスメント方法が明記されていると使用しやすい。」

⑤「チーム内で理解しあえるような、評価のまとめ方の必要を感じた」

⑥「今回分析ファイルが MAC に対応できてなくてデータの変換を事務局に委ねたのですが、そこは是非改善していただけると嬉しいです。」

⑦「技術的に難しいかと思いますが、1ファイルで使用できるとありがたいと思います」

b)設問6が「思わない」に係る回答

①「大まかな項目にし、対象者によって必要な情報を記載やチェックできる方法など、総量を減らしシンプルでないと活用される可能性は低い。」

②「全てにおいてもっと簡単に扱える様にしてほしい」

③「少なくとも知的レベルおよびASD特性の重症度によって項目が絞られるシステムがほしい。また、Excelはユーザビリティが低くメンテナンス性が悪いいためHTML等で作成してしまったほうが良いと思われる。」

④「項目を絞って必要な部分だけでも評価することによって現状が把握できればと良いと思う。」

⑤「もう少し簡易的なものにできれば活用の幅が広がる。」

⑥「PCでの操作が難しかったこと。中核的人材養成研修においてはICFの考え方は重要であるが、アセスメントととって分析していくことが今後必要なかはわからない。」

3. 研修前後のICFフォームの検討

1)抽出されたICFフォーム数および当該事業所のICFアンケート回答結果

参加事業所が提出した132の全ICFフォームから「B.研究方法 2. 3)研修前後のICFフォームの検討」に記載した観点で「QOL支援の観点が明確に読み取れる」ものを抽出した結果、45のICFフォームを抽出した。これらに該当する45事業所について、設問3・設問4・設問5の回答パターンを確認した結果を、表3に示す。なお、1事業所についてはICFア

ンケートが未回答となっている。表3に示すように、設問5の回答は「できた」が11、「多少できた」が28、「あまりできなかった」が5であった。

また、設問1「環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか？」の回答は「そう思う」が41で93.2%、「多少そう思う」が2で4.5%、「あまり思わない」が1で2.3%であった。設問2「ICFの観点による環境調整支援」は対象者のQOL向上に大切だと思いますか？」の回答は「そう思う」が40で91.0%、「多少そう思う」が2で4.5%、「あまり思わない」が2で4.5%であった。ICFシステムの活用に係る設問6の回答は「そう思う」が17で38.6%、「多少そう思う」が23で52.3%、「あまり思わない」が3で6.8%、「思わない」が1で2.3%であった。

2)抽出されたICFフォームに示されるQOL支援の内容(抜粋)

①「促進環境として把握されたモデル利用者の興味関心を活用した余暇活動をダウンタイム(何もすることがない時間)に導入し、不穏行動制止のための職員マンツーマン見守りから30分の一人遊びが可能となり、日常生活の安定につながった。」

②「文字が読めるという強みを活用して、食事時のおかわりの選択ボードとおかわりカードを準備して満足感のある食事を保証するとともに、一人の遊びスペースで好みの物で遊ぶ支援によって快適な時間を過ごせている。」

③「居室をテレビ設置可能な部屋に変更し、テレビ、DVDの設置を行うなど、居室をご本人が居心地良く過ごせる部屋に変更することに加え、本人が望む「散歩」を日課として取り入れてくれた。」

④「ご本人がその場その場で対処していた(カーテンを閉めたがる)光への苦手さ(事前フォームで把握されていた)に対して、光刺激が強い場面でアイマスクを提供して、ご本人の快適さを保証。」

⑤「家族に協力してもらい、入浴の事前準備をして登所することで、利用日の確実な入浴が一貫したスケジュールとして実現でき、清容面が改善。」

⑥「ご本人の不安軽減に必要な情報を伝達し心理的安定を保証する支援。本が好きだが破損してしま

表3 抽出されたフォームに係る設問3・4・5の回答タイプ

回答type	設問3	設問4	設問5	回答数
type01	把握できた	得られた	できた	10
type02	多少把握できた	多少得られた	できた	1
type03	把握できた	得られた	多少できた	9
type04	把握できた	多少得られた	多少できた	3
type05	多少把握できた	得られた	多少できた	1
type06	多少把握できた	多少得られた	多少できた	14
type07	あまり把握できなかった	多少得られた	多少できた	1
type08	把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type09	あまり把握できなかった	あまり得られなかった	あまりできなかった	1
type10	多少把握できた	多少得られた	あまりできなかった	2
type11	把握できた	多少得られた	あまりできなかった	1

うので「図書館の本」という建付けで、読んで返却するように設定する支援で破損しなくなった。」

⑦「食事時の不穏行動を促進的環境因子である構造化環境の着想から、食事介助方法のバラツキにあると考え、食事を差し出す方向を統一し、静かに食べられたことに称賛する支援。」

⑧「甘い匂いに惹かれるためか周囲の人に密着して首元の匂いを嗅ぐ行動が、自室に芳香剤を置く支援の実施により軽減。匂いを嗅いで表情が和らぐ様子も見られる。」

⑨「ご本人にとって不快な環境因子(ファスナー)に配慮して、ファスナーがついていない衣服を提供する支援、寝具についても童謡の支援を実施。」

⑩「気温・湿度上昇により不快感が増大するため空調で対応し、本人が快適な湿度、温度設定にするとともに、アトピーにはシャワー浴を行う支援を実施。」

4. ICF 評価結果の分析に基づく強度行動障害に特化した ICF 項目の絞り込み

1) 活動と参加項目の絞り込みの結果

表 4a に強度行動障害支援 ICF 活動と参加項目の第 1 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番号、その右列は項目タイトル、タイトルが type の 2 列は「強み」「支援維持」「支援収支」の評価を受けた度合いであり、3ctgry は 3 支援カテゴリすべてで高頻度の評価、2ctgry および 1ctgry は表中

頻度の評価、2ctgry および 1ctgry は表中に示す支援カテゴリで高頻度評価であった項目である。その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において事前から事後に改善効果が認められた項目である。当該列中の○は上位 75%以上、△は 50%から 74%の頻度で改善が認められた項目である。

表 4b に強度行動障害支援 ICF 活動と参加項目の第 2 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番号、その右列は項目タイトル、タイトルが type の 2 列は「強み」「支援維持」「支援収支」の評価を受けた度合いであり、3ctgry は 3 支援カテゴリすべてで高頻度の評価、2ctgry および 1ctgry は表中に示す支援カテゴリで高頻度評価であった項目である。その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において事前から事後に改善効果が認められた項目である。当該列中の○は上位 75%以上、△は 50%から 74%の頻度で改善が認められた項目である。

表 4 a 強度行動障害支援 ICF 活動と参加項目 第 1 選択群						
第1選択項目 (20項目) ; 事前・事後統合	type		R3_調査結果			R7_事前事後
			第 1	第 2	第 3	改善効果
d110	注目する、注意して見る、見分ける、見て確認するなど目的をもって見ること	3ctgry	○			○
d115	注意して聞く、聞き分ける、聞いて確認するなど目的をもって聞くこと	3ctgry	○			○
d130	まねをして学ぶこと	考案	○			△
d161	課題や作業が終わるまで注意を逸らさないこと	2ctgry 維持・修正	○			○
d177	意志決定すること	考案	○			○
d210a	一つの作業や活動を一人ですること	3ctgry	○			○
d230a	日課(日々のお決まりの作業や活動)を一人で行うこと	3ctgry	○			○
d240	ストレスや不安を伴う作業や活動の遂行	2ctgry 維持・修正		○		○
d250	場面に応じた行動のコントロール	2ctgry 維持・修正		○		○
d3151-2	記号やシンボルの理解、絵や写真の理解	3ctgry	○			○
d3351-2	記号やマーク、絵や写真によるメッセージの伝達	1ctgry 維持	○			△
d440	細かな手の動き(手や指の巧緻動作)で物を扱うこと	1ctgry 強み	○			○
d455	移動すること	1ctgry 強み	○			○
d445	手と腕をうまく使って物を扱うこと	考案	○			△
d510	自分の体を洗うこと	2ctgry 維持・修正	○			○
d530	排泄、生理のケア	考案	○			
d540a	衣服の着替え、履き物の脱ぎ履き	3ctgry	○			○
d550	食べること	考案	○			○
d571	危険を回避し安全を保つための配慮や注意	1ctgry 修正	○			○
d880	一人でもまたは誰かと遊ぶこと	その他	○			

表 4 b 強度行動障害支援 ICF活動と参加項目 第2 選択群						
第2選択項目（18項目）；事前・事後統合	type		R3_調査結果			R7_事前事後
			第1	第2	第3	改善効果
d120	触覚や嗅覚や味覚を用いてそれが何であるかや違いを確認するなど	2ctgry	強み・維持	○		
d175	問題を解決すること	その他			○	○
d160	何かに注意を集中すること	2ctgry	維持・修正	○		○
d210b	他者と協力して一つの作業や活動をする	2ctgry	維持・修正	○		△
d220a	複数の作業や活動を一人ですること	1ctgry	維持	○		△
d310a	話し言葉で伝えられたメッセージの理解	考案		○		△
d3150	表情やジェスチャーが伝えるメッセージの理解	1ctgry	強み	○		○
d325	書き言葉によるメッセージの理解	考案		○		○
d330	話し言葉によるメッセージの伝達	1ctgry	強み		○	△
d331	声によるメッセージの伝達	3ctgry		○		
d3350	表情やジェスチャーによるメッセージの伝達	3ctgry		○		○
d415	同じ姿勢を保つ（姿勢の保持）	3ctgry		○		△
d540b	場面や気候に応じた衣服や履き物の選択	2ctgry	維持・修正		○	△
d560	飲むこと	1ctgry	維持	○		
d570	健康に注意すること	考案	○			△
d760	家族との対人関係	3ctgry		○		
d860	日常的なお金の使用や貯蓄	考案	○			△
d920	レクリエーションとレジャー	その他		○		△

2)環境因子項目の絞り込みの結果

表 5a に強度行動障害支援 ICF 環境因子項目の第1 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番号、その右列は項目タイトル、その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において「評価対象となりやすく、促進あるいは阻害の影響を与えやすい項目」で該当する順位群である。

表 5b に強度行動障害支援 ICF 環境因子項目の第2 選択群を示す。表の最左列は ICF の項目番

号、その右列は項目タイトル、その右 3 列は令和 3 年度調査の第 1 選択群、第 2 選択群、第 3 選択群との対応、最右列は令和 6 年度の ICF 評価において「評価対象となりやすく、促進あるいは阻害の影響を与えやすい項目」で該当する順位群である。

表 5 a 強度行動障害支援 ICF環境因子項目 第1 選択群					
環境因子	第1 選択項目（15項目）	R3_調査結果			R 6 評価
		第1	第2	第3	順位群
e110a	食べ物や飲み物	○			1
e110b	薬や栄養補助剤	○			1
e1150	日常生活で使う一般的な製品と用具（改造や特別な設計なし）	○			1
e1151	日常生活での使いやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	○			2
e1250	情報の受信や発信、コミュニケーションのための製品や用具（改造や特別な設計なし）	○			1
e1251	情報の受信や発信、コミュニケーションを支援するために工夫・改造された製品と用具。	○			1
e250	音	○			1
e2250	気温	○			1
e2251	湿度	○			1
e2253 -2255	雨や雪、風などの天候、降水量や風速、四季の変化など	○			1
e240	光	○			1
e310	家族や近い親族の物理的支援と心理的支援	○			－
e410	家族や近い親族の特性理解と多様な観点	○			－
e355	医療・保健・福祉の専門職の物理的支援と心理的支援	○			－
e450	医療・保健・福祉の専門職の特性理解と多様な観点	○			－

表 5b 強度行動障害支援 ICF環境因子項目 第2 選択群					
環境因子	第2選択項目 (12項目)	R3_調査結果			R6 評価 順位群
		第1	第2	第3	
e11520	一般的な遊び用の製品と用具 (改造や特別な設計なし)	○			1
e11521	遊びやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	○			2
e1300 (注)	作業(学習)のための一般的な製品と用具 (改造や特別な設計なし)		○		1
e1301 (注)	作業(学習)のしやすさを支援するために工夫・改造された製品と用具	○			2
e225	振動	○			2
e2252	気圧	○			2
e260	匂いや空気	○			2
e340	対人サービス提供者の物理的支援と心理的支援	○			－
e440	対人サービス提供者の特性理解と障害観	○			－
e420	知人、仲間、同僚、隣人、地域の人たちの物理的支援と心理的支援	○			－
e425	知人、仲間、同僚、隣人、地域の人たちの特性理解と障害観	○			－

(注) ICF原語は「学習」だが強度行動障害版では作業(学習)とする。

(注) ICF原語は「学習」だが強度行動障害版では作業(学習)とする。

D. 考察

1. 事前講義の評価アンケート

1) 講義③-1 標準的な支援を実施するための基本的な枠組み

本講義は三層構造について説明したもので、理解度は「すべて理解できた」が73.9%、改善度も「改善点なし」が79.6%と良好な結果であった。また意見概要でも良かった点として「QOLの視点を明確に示してくれた」「本人視点から考える大切さ」が示され、講義の目的は達成されたとと言える。一方、意見概要の改善点として「具体的な内容が示されていないと支援経験のない受講者にはイメージができない可能性がある」が示され、内容が多少抽象的であった点の修正が今後の課題である。

2) 講義③-2 ICF環境因子システムのデータ入力と分析方法

本講義は、日常生活場面行動アセスメント(Rainbow)とICFシステムの評価を単一のエクセル内で連動していることと両評価の評価法、ICFシステムのデータ分析方法を説明したものであるが、理解度は「すべて理解できた」が19.7%に留まり、80.3%は一部またはまったく理解できなかったという結果であった。また改善度も「改善点なし」は64.8%に留まった。この理由は、連動の仕組みとICFシステムのデータ分析方法が非常に複雑であったことである。

う。連動については、日常生活場面行動アセスメントを評価すれば、その項目に対応するICF項目が評価される仕組みとしたが、別評価であるため、エクセル内では別シートに評価結果が表現される。また、ICFシステムのデータ分析には3つのエクセルを別エクセルへのシート転写やデータエクセルの読み込みといった操作が必要であり、エクセル操作の初心者では対応ができないものであったと思われる。実際、意見概要の改善点については「データ入力等の方法が複雑で理解するのが難しい」「一回の講義だけで理解ができない」が示されている。良かった点としては「全体像を把握できた」「分析のヒントになった」が示されているが、「すべて理解できた」が19.7%であったことを考えると、このような意見を持てたのは受講者のごく一部であったと思われる。以上より、日常生活場面行動アセスメントとICFシステム評価を連動させて評価労力を軽減させるという試みはうまくいかなかったと評価するのが妥当である。特に、評価方法と評価データの分析方法という「方法」に係る講義でこのような結果となったことは、受講者の負担増にもつながっており、今後の改善が必須であることを強く示すものである。

3) 講義③-3 ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する

本講義は、標題の通り、ICFシステムで把握した情報をQOL支援に活用する実際例を示しながら、QOL支

援の考え方と実践を説明したものである。理解度は「すべて理解できた」が52.1%、改善度は「改善点なし」が93.0%であり、講義自体には問題はないが、その内容理解は十分ではなかった。意見概要では良かった点が「QOL向上の4つの視点を通して、対象者を見ること、ポジティブな視点を学ぶことができた」が示される一方、改善点として「シートを打ち込みながらや記入事例の提示があるとよかった」が示され、具体性が十分ではないことが示唆された。実際、ICFによる生活場面評価を支援に活かす実践はこれまでほとんど行われていない。そのため、本講義で示した支援の考え方が受講者にとって馴染みがなかったことが考えられる。実際、「ICFシステムによる生活全体のQOL評価に関するアンケート」の自由記述回答には「ICFシステムは初めて得た知識」「初めて触れたアセスメント方法」「他のシートの方が使い慣れている」という内容が認められた。

以上、本研修におけるICFシステムの位置づけと活用に係る3つの講義への全体アンケート結果を考察してきたが、強度行動障害における三層構造の考え方とICF観点のQOL支援を4つのポイントで示すことを通じて「本人視点の大切さ」と「ポジティブな視点でご本人を捉えることの大切さ」が受講者に伝わったものと考えられる。

2. ICFシステムによる生活全体のQOL評価に関するアンケート

1) 設問1と設問2について

設問1は「環境調整支援の三層構造は強度行動障害の支援において必要な考え方だと思いますか?」、設問2は「ICFの観点による環境調整支援」は対象者のQOL向上に大切だと思いますか?」であったが、これらの設問への回答は「そう思う」が80%以上で、「多少そう思う」を合わせると95%以上の肯定的回答であった。この結果は、事前講義の講義③-1と③-3で説明した内容が受講生に伝わったことを示すものと考えられる。実際、両講義への「そう思う」の回答理由に示されていた内容として設問1では「機能分析からのアプローチ事例には本人主体の幸せ・豊かさの観点が抜けている」「何もしない・

ただ座っているだけの利用者へのQOL向上にはICFの考えが必要」「強度行動障害の状態緩和へのTEACCHやABAの活用が当事者のQOL向上につながるが説明できなかったが、ICFの視点は有効な手立てとなる」「ASDの特性だけに着目した支援ではなく、人としての安全安心を優先させることがQOL向上につながる」、設問2では「生活の範囲を支援者が決定してしまっているのではないか」「QOL向上には、個人の能力・機能だけでなく環境の相互影響を捉える視点が必要」「これまでの支援の焦点は行動障害の緩和ばかりで、生活全体を評価する視点が乏しかった」

「ICFでの考察によって対症療法だけの支援対応が変わった」が示されている。これらの回答理由は、ICFシステムの導入が「機能分析や冰山モデルによる強度行動障害支援をQOL支援の観点から補完するもの」として受講者に認知されたことを示唆している。ICFシステムは、機能分析と冰山モデルと同じように「環境調整支援が重要であること」を伝える。しかし機能分析と冰山モデルには「課題行動が消退あるいは軽減する」という意味でのQOL向上は存在するものの、それ以上のQOL向上の概念は明示的には含まれていない。ICFシステムの補完機能は「支援対象者の生活を総点検して、快適さに欠ける生活場面を把握し、それを改善する」ことを通じて、QOL支援を具体的に明示することにある。ただし実際に支援対象者がQOLの向上を感じているか否かを確認することは難しく、設問1と設問2の「あまり思わない」については「ICFシステムの項目の多くがポジティブな評価であったとして、それが、QOLが高い状態であると言えるかは議論の余地がある」との回答理由が認められた。このような限界はありつつも設問1と設問2の回答分布と回答理由は、強度行動障害支援にICFを位置づけたことによって「支援対象者のQOL向上を意識的に考えることの必要性が受講生に伝わった」という点で意味があったと思われる。以上の議論に対する補完的考察となるが、設問1の「あまり思わない」の回答理由として「環境調整支援をするだけでなく、“教える”というアプローチも重要である」旨の回答が認められた。この意見が伝えようとする内容には肯ける部分もある一方、「環境

調整支援の欠如した学びのアプローチ」が ASD の人たちにあって学びづらい環境であることも事実である。私たちは、環境調整支援の大切さを多くの人たちに伝えていくことの難しさを自覚しつつ、ASD の人たちにあって快適な環境を提供していかなければならない。

2) 設問 3・設問 4・設問 5 について

設問 3 は「ICF システムの評価で要支援者にとって快適ではない生活場면을把握できましたか?」、設問 4 は「ICF システムの評価で要支援者に快適な生活を提供する手がかりは得られましたか?」、設問 5 は「ICF の観点による環境調整支援」を実際に行うことができましたか?」であり、これらについては 3 設問とも、設問 1・2 と比べて、「そう思う」が減少して 20-30%、「多少そう思う」が 60%程度に増加した。これら 3 設問の回答理由に示されていた内容として、表 1 の type01、type03、type06 の回答パターンについては、type01 では「ICF システムの評価で対象児童の生活を細かく分析することができた」「作業場面の嫌刺激が課題行動につながっていることが共有できた」「聴覚過敏との誤解が解け、特定利用者の動きや声が気になっているとわかった」「ICF の観点で支援を考えることが多くなった」、type03 では「ICF シートで色々な観点から探っていくことで QOL 向上の手立てを考えて実施できた」「細かな項目に回答していくことで、今まで気づかなかった気づきを支援に取り入れられた」が示されていた、type06 では「冰山モデルやストラテジーシートが行動によりつながると考えた」「本人にとっての不快感の除去や新たな体験や経験ができるように取り組めた」「初めて行う内容で上手く取り組めたとは思わないが、取り掛かる事は出来た」「ICF システムの活用経験が積み重なっていないため、十分な成果を得られたかどうか判断に迷う」「情報量が多すぎる。分析に至るまでの時間がかかりすぎる。」が示されている。Type06 の回答には ICF システムの活用可否的な内容もありシステム改善の必要性を示している。「初めて行う内容」であり「情報量が多すぎて時間がかかる」、そして「冰山モデルやストラテジーシートが行動によりつながると考えた」との回答は、受講者が ICF システムに

ついて感じることを端的に表していると思われる。

実際、表 2 の type02、type05 の回答理由については、type02 では「他のシートの方が使い慣れている」「ICF システムの評価システムが難しく、理解も追いつけなかった」「設問が多くどこから取り組んでいけばよいのかが分からず優先順位がつけられなかった。」、type05 では「ICF システムは初めて得た知識で運用するには知識と経験が必要」、「普段から本人を観察して強み・弱みやスキルを把握していれば、QOL の向上に役立てられる」「環境調整に関しては学習スタイル等の特性、冰山モデル、ストラテジーシート中心で考えた」が示された。

以上、設問 3・4・5 の回答理由が示すことは「ICF システムは支援対象者の生活を細かく捉えて新たな気づきをもたらすとともに QOL 支援につながる一方、初めてのアセスメントで馴染みがなく情報量が多く複雑なため、使うのが難しい」ということである。先にも述べたが、この後半部分の課題については、改善に向けた修正が必須と考えられる。

3) 設問 6 と設問 7 について

設問 6 は「ICF システムによる生活全体の QOL 評価は日々の支援の中で使っていけると感じますか?」であるが、設問 3・4・5 と同様、「そう思う」が 30%弱で、「多少そう思う」が 60%、「思わない」が約 4%であった。回答理由の内容としては「そう思う」では「このアセスメントの分量は支援の中では必要であり支援者側の視点やスキルも向上するが負担感はある」「個別的な取り組みを行う中で QOL の向上のみでなく、行動障害の緩和にもつながった」「今回の実例をもとにすれば実用可能と考えられるが、運用に時間は掛かる。」が示された一方、「思わない」では「複雑すぎて量が多すぎる」「ICF システム自体がわかりにくく、使いづらいと感じる」が示されている。これらの回答内容では「そう思う」「あまり思わない」の両方において「ICF システムの複雑さと情報量の多さ、時間を要すること」が指摘されており、この点、改善に向けた修正が必須である。

設問 7 は「生活全体の QOL 評価で用いた ICF システムについて今後改善すべき点があれば教えてください。」であったが、「打ち込みの負担感が大きい」「ア

アプリケーションパッケージにしてもらいたい」「入力の簡易化・簡素化」「分析アプリの MAC 対応」「1 ファイルでの使用」「項目を絞って必要な部分の評価のみ」などが示された。

以上、設問 6 と設問 7 の回答は、③-2 の事前講義が受講者にとってわかりづらかったことを直接に反映した結果であると思われる。その一方で、ICF システムの活用が支援対象者の詳細な理解と QOL 支援につながるとの肯定的評価もあり、この評価に沿った支援の実施を現実的に可能なものに落とし込んでいく作業が求められる。

最後に、ICF システムによる生活全体の QOL 評価に関するアンケートの結果について留意しておくべき点について言及したい。それは、次の「ICF フォームの検討」に係る考察とも関連することであるが、設問 2 と設問 5 の設問文にある「ICF の観点による環境調整支援」と設問 3 と設問 4 の設問文にある「ICF システムによる評価」の 2 つの表現が、受講者の理解として完全には重なっていない可能性である。ICF システムによる評価とは、支援対象者について「①支援がない場合の困難性を捉え、②その困難性が軽減する支援や場面を記述し、③その軽減の効果の大小を捉える」というもので、②によって得られた支援の手がかりを支援に活用するものである。しかし②の「困難性が軽減する支援や場面」には、ASD 特性にマッチした環境調整やストラテジーシートで描かれる課題行動前後の環境調整も問題なく記述し得る。実際、分担研究者自身が行った事前講義③-3 では、そのような仮想事例を ICF システムの評価シートを示しつつ、QOL の支援の事例として説明している。さらに三層構造の事前講義では、ICF の観点による環境調整支援、学習スタイルに基づく環境調整支援、機能分析による環境調整支援を相互に関連しつつ、強度行動障害の標準的な支援を実現していくための全体的枠組みとして提示している。以上のことから、本アンケートのタイトルは「ICF のシステムによる生活全体の QOL 評価について」であったものの、設問 2 と設問 5 は三層構造に示される総体としての支援、設問 3 と設問 4 はそれよりも狭い範囲の ICF システムによる評価に基づく支援として、受講

者が捉えた可能性がある。加えて、今回の ICF 評価は同じエクセルファイルの中で日常生活場面行動アセスメントと連動させるという仕組みを設定した。このことが、上記のような理解の混線をもたらした可能性が考えられる。

3. 研修前後の ICF フォームの検討

1) ICF フォームの抽出結果について

抽出の基準は「ASD 特性と環境のミスマッチを解消する環境調整支援だけでなく、生活における快適さの向上が読み取れるもの」であり、45 の ICF フォームが該当し、これは全体の 31.9%に当たる。ただし確認しておくべきは、残りの 68%の ICF フォームに記載された支援も課題行動の消退や軽減には十分に効果的で、モデル利用者の方々は、落ち着いた生活を取り戻しているということである。

そもそも ICF フォームは研修で学んだ内容を活用した支援の結果を、ICF 関連図の要素に重ねて配置することで、支援の全体像とその研修前後での成果をわかりやすく示すことを目的としている。その意味では、ICF フォームに記載することと、ICF システムを支援に活用することは密接に関連するものではない。実際、研修資料として ICF フォームの記載例として示したもの（図 6a, 図 6b）に記載されている支援内容は、パーティション、スケジュール・ワークシステムの活用、生活品の配置位置を写真で示すなどが記載されており、気になる刺激の遮蔽や視覚的情報提示といった ASD 支援の王道的内容となっている。加えて、講義③-3「ICF システムの情報を QOL 支援に活用する」のスライド資料では、「自分の持ち物を色で示す」「複数物からの選択では提示する物の数を減らす」「事前に選択カードで決めておく」「ワークシステムの活用」（図 5）のように、視覚支援を ICF システムで把握した情報を活用した QOL 支援として例示している。

ここで確認しておくべきは、この結果が「抽出に該当しなかった ICF フォームにおいて QOL 支援が認められなかった」のではないことである。多くの ICF フォームに記載された支援内容は、ASD 特性と環境とのミスマッチを考慮して環境調整を行う冰山モデルに合致したものであるし、機能分析を通じて課題

行動が生じる先行要因と後続要因が明らかとなり、戦略シート作成・検討によって支援を決定した。これらの研修内容は結果的に、ICF システムによる生活場面の評価だけでなく、ASD 特性と環境とのミスマッチを解消する氷山モデルによる支援、機能分析による支援のすべてを QOL 支援につなぐ形となっている。そのため、「QOL 支援」を強調した ICF フォームには三層構造のすべての支援が記載されたと考えられる。

以上より、抽出基準に該当する ICF フォームにフォームは全体の約 32%であったが、抽出に該当しなかった ICF フォームにおいても、記載されている支援を QOL 支援の観点から意味づけているものが多く、この点、QOL 支援を強調するという本研究の研修設定においては良い結果が得られたと考えられる。

2) 抽出された ICF フォームの QOL 支援内容について

抽出された ICF フォームの支援内容は「ダウンタイムへのご本人の興味関心活動の導入」「ご本人が快適に過ごせる居住環境の設定」「ご本人の経験に照らしてわかりやすいルールを導入で課題行動が消退した支援」「ご本人の清潔面での QOL に焦点を当てた入浴支援」「ご本人の気持ちを尊重し、それを把握するための支援」「ご本人の好きな香りを、自然に提供する支援」「ご本人が気になる物を生活から取り去る支援」などである。これらは快適な暮らしを創出するために必要な工夫という観点で支援の着想や支援の実際を捉えられるものであり、支援対象者が ASD 特性を有していても、QOL の向上につながる内容と考えられる。そして結果で取り上げた支援の中には、支援対象者の QOL という観点から支援が考案されたために、支援対象者だけでなく支援者双方の QOL が維持されたものもある。例えば支援事例⑧の「甘い匂いに惹かれるためか周囲の人に密着して首元の匂いを嗅ぐ行動が、自室に芳香剤を置く支援の実施により軽減。」では「周囲の人が課題行動のトリガー刺激である」という理解に立てば、当該の支援者の関わりを停止するという対応につながったかもしれない。そうではなく「当該の支援者がつけている化粧品や香水の匂いが課題行動のトリガー刺激である」という理解に立ったとしても「それらの支援者は当該利用者と関わる時には、化粧も香水もつけない

ようにする」という対応になったかもしれない。しかし、そういった対応は生活の中で気持ちが安らぐ時間をご本人から奪うこととなり、結果的に、不穏行動は解消せず、代替的に自立活動が導入されて「落ち着いた時間を過ごす」という支援になってしまった可能性もある。しかし、この支援事例では、ご本人の興味関心対象が人ではなく香りであることを把握し、芳香剤を使うことでご本人の安らぎの時間を保証するとともに、周囲の支援者への生活制限(化粧品を使わないこと)が回避され、双方の QOL 向上と維持につながっている。

先に、「2. 1)」の考察において「ICF システムの補完機能は三層構造を通じて機能分析や氷山モデルに QOL 支援の概念をつなぐことにある」と述べたが、抽出対象となった ICF のフォームに記載された支援を特徴づける QOL 支援の捉え方が ICF システムを通じて広がっていくことによって三層構造の考え方が支援実践に実効的に機能するものとする。

4. ICF 評価結果の分析に基づく強度行動障害に特化した ICF 項目の絞り込み

1) 活動と参加項目について

表 4a, 表 4b に示した、強度行動障害支援の ICF 活動と参加項目は、第 1 選択群が 20 項目、第 2 選択群が 18 項目であり、令和 6 年度に使用された 67 項目の 43%減となっている。また、評価の指針として、第 1 選択群は全項目を必須の評価とするが、第 2 選択群は支援対象者の状態像に応じて評価するものとしており、評価項目選定の柔軟度も高くなり、支援対象者の多様性に少ない項目数で対応できるものと考えられる。また、選定された項目は、方法で述べた令和 6 年度の評価データを分析して絞り込まれた項目を令和 3 年度調査で「強度行動障害の QOL 支援への有用性」の評定により設定された第 1 選択項目群、第 2 選択項目群と非常に高い一致率を示しており、強度行動障害支援における高い妥当性を有するものと考えられる。ただし、ICF フォームの検討を通じて、評価・活用された項目には、第 1 選択群・第 2 選択群には入っていない項目もあり、これらを、評価労力を上げない形で補完することは課題である。

2) 環境因子項目について

表 5a, 表 5b に示した、強度行動障害支援の ICF 環境因子項目は、第 1 選択群が 15 項目、第 2 選択群が 12 項目であり、令和 6 年度に使用された 42 項目の 36%減となっている。社会制度などの環境因子である第 5 章は全項目を削除している。また、評価の指針として、第 1 選択群は全項目を必須の評価とするが、第 2 選択群は支援対象者の状態像に応じて評価するものとしており、評価項目選定の柔軟度も高くなり、支援対象者の多様性に少ない項目数で対応できるものと考えられる。ただし、ICF フォームの検討を通じて、評価・活用された項目には、第 1 選択群・第 2 選択群には入っていない項目もあり、これらを、評価労力を上げない形で補完することは課題である。

E. 補記

1. ICF シートと ICF 把握データの分析アプリの改善

1) ICF シートの改善

令和 6 年度に使用した活動と参加の ICF シートは、日常生活場面行動アセスメントとの評価と連動して、ICF シートの対応後目の評価がなされるものであったが、併せて当該項目の ICF 原本の項目タイトルを構成するその他の活動についても評価できるようになっていた結果、ICF のシートのすべての項目を評価するとなると、かなり多くの項目数となっていた。加えて、ICF システムは一般の尺度とは異なり、2-3 ヶ月から半年と行った長期間の支援経過の中で少しずつ評価を蓄積していくことを想定しているため「支援メモ」のその時々記録を行い、「支援のまとめ」に「①支援がない場合の困難性、②困難性が軽減する場面や支援。③軽減効果の大小、④その他」を補足情報として記入するという形式となっていた。そして、ICF のデータの分析アプリで支援カテゴリーに分類する際には「支援のまとめ」のみが反映されるものとなっていた。そのため、ICF シートの構成が複雑であるとともに、最終結果に反映されない記録欄もあり「記録と分析の全体の流れ」を事前に理解しないと使いづらいものとなっていた。そのため、活動と参加の ICF シートに係る改善方針としては、(a) 日常生活場面行動アセスメントとの連動の廃止、

(b) ICF 原本の項目タイトルを構成するその他の活動の評価の廃止、(c) 支援メモ欄の廃止である。これらの結果、活動と参加の ICF のシートは、先述した強度行動障害支援版の各項目について「①支援がない場合の困難性、②困難性が軽減する場面や支援。③軽減効果の大小」を評価し、その補足情報をメモするというシンプルな構成とする。

環境因子の ICF シートについては、日常生活場面行動アセスメントとの連動はなく、そもそもシンプルなものであるが、先に述べた通り、強度行動障害支援版の ICF 環境因子項目に応じて項目数を減じた。

2) 分析アプリの改善

令和 6 年度に使用した分析アプリは、活動と参加のデータについては、日常生活場面行動評価と連動したエクセルから特定のシートを別エクセルに転写紙、そのエクセルを読み込んで支援カテゴリーに分類するという操作が複雑なものであった。環境因子についても、ICF シートを分析アプリに読み込んで支援カテゴリーに分類する必要があった。以上の ICF 環境因子データの入力から分析への手順が複雑すぎて、受講者の理解を阻んでしまったことは既に述べた。このため分析アプリの改善方針としては、活動と参加の ICF シート、環境因子の ICF のシートのそれぞれに分析アプリ機能をマクロ設定して、ワンクリックで支援カテゴリーに分類してシートごとに示すエクセルを生成できるものとする。このことによって、ICF のデータの入力と分析を一つのエクセルファイルで行えるようになり、分析操作も、別ファイルの読み込みを必要としないワンクリックでの分析結果のファイル生成ができるものとする。

以上の分析アプリ機能を含む ICF シートの開発によって、今回のアンケートで寄せられた、ICF システムの改善の主な要望には応えられると考える。ただし、要望された改善点である「分析アプリが MAC で動かない」に対しては、対応ができなかった。

F. 結論

強度行動障害支援に QOL 支援の観点をつなぐため、標準的な支援を実施するための基本的な枠組みとして提示した「環境調整支援の三層構造」に ICF の観

点による環境調整支援を位置づけ、その具体的ツールとして ICF システムを導入して研修と実践を進めた。その結果、環境調整支援の三層構造と ICF の観点による QOL 支援の重要性は受講者に十分伝わった一方、ICF システムを活用した評価と支援活用については、受講者によってバラツキが出た。ICF システムの活用がうまく行かなかった原因として、ICF システムの情報量が多く複雑、評価ツールの操作がわかりづらい、といったことが把握された。一方、環境調整支援の三層構造の提示や ICF のフォームにおける QOL 支援の強調を通じて ICF の観点による QOL 支援の考え方は、ICF システムだけでなく、冰山モデルに基づく支援や機能的アセスメントによる支援にも、QOL 支援の観点が反映されることが認められた。

今回の研究において、ICF の観点を強度行動障害支援に導入して QOL 支援を意識することにつながることが可能と思われた。但し、今後、ICF システムを使いやすくするための改善作業は必須である。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし